

「庭訓」

孔子(B.C551～B.C479)には子供が一人いました。名前は孔鯉(こくり) (B.C532～483)といい、若くして父の孔子より早く他界してしまいます。

その孔鯉が孔子の門弟から「あなたは孔先生の一人息子であられるから、やはり特別な教育を受けてこられたのでしょうか」と尋ねられます。

その時、孔鯉は、「私は特別の教育をしてもらってはいません。父(孔子)が私に言った事はたった二つの事です」

「それはある時、道場の庭を歩いていたら、父(孔子)と会いました。

その時父は、『詩』を学んだかね」と聞きました。

私が「まだ『詩』を学んでいません」と言うと

『詩』を学ばないと表現力が身に付かないよ」

と言われ、私は真剣に『詩』を学びました。

その後、また庭を歩いていると父と会いました。

すると今度父は『礼』を学んだかね」と聞きました。

私が「まだ『礼』を学んでいません」と言うと『礼』を学ばないと社会人として困るよ。

人間関係を律する規範だからね」と言われ、それから私は『礼』を真剣に学びました」

「私が父から教わった事はたったこの二つの事だけです」

と答えたと言います。

これが有名な「庭訓」という言葉のいわれです。

ここで言う「詩」と「礼」は、四書五経の、五経の中の「詩経」、「礼記」の事でしょうが、いずれにしても父親と子供(特に男の子)の教育の理想のあり方でもあると思います。

子供は、父親の日頃の生き様に畏敬の念を持っている。だから、その父親から言われる一言の持つ意味を深く理解し、その言葉に従って真剣に学んでいく。

決して、多言は必要ないのです。

ひるがえって現代、父子のあり方を見ると、その接する時間も、関わり方も孔子と孔鯉の関係からみるとはるかにその絶対量は長いと思います。

それは、それで、時代の流れとして大切な事だとは思いますが、理想の父子あるいは師弟の関係は、この「庭訓」の様でありたいものだと思います。

子(弟子)は、父(師)の日常の生き様を崇敬し、日頃その後姿から学んでいて、父(師)に対して、人物としての信頼が絶対としてある訳です。

そうした中で、父(師)の一言が、子(弟子)の人生に大きく影響を与える程となる。

「巧言、令色、少なりし仁」とも論語にあります。

仁者は黙して語らずなのかもしれません。

子供や、社員の教育に多言を要する現代において、指導的立場にある我々、中高年の人間は、己自身のあり方を今一度反省してみる必要がある様に感じる今日この頃です。

徳真会グループ
代表 松村 博史

